

情報発信の取組 1 ● 広報紙

被災地以外からは、なかなか知ることができない復興の「いま」を知ってほしいという思いから、宮城県は2016年5月から2021年3月まで「震災復興発信プロジェクトNOW IS.」を展開してきました。



広報紙 NOW IS.

月1回、県内各地の復興の「いま」を発信してきました。

宮城にゆかりのある著名な方とともに被災地域を歩くインタビュー企画を巻頭特集として、県内の復興状況や、復興に向けた取組等を紹介する広報紙を毎月11日に発行してきました。公共施設を中心に無料で配布したほか、Webサイト（みやぎ復興情報ポータルサイト）にも掲載しました。



対談

地域の復興を盛り立てるキーパーソンと、巻頭を飾る著名人が、それぞれの想いを語りあう対談ページ。会話から垣間見える「当時」と「いま」の想いを特集しました。



防災

様々な防災や減災の取組・教訓等を未来に繋ぐため、最前線で奮闘する人々の声を紹介しています。生活に活かせるヒントが隠れています。



応援

復興業務をサポートするために、全国の自治体から宮城に派遣されている応援職員を紹介。宮城県から令和2年7月豪雨の被災地支援に派遣された職員のインタビューも。



Thank you from MIYAGI

宮城から、ありがとう。

全国各地、世界各国から寄せられた、たくさんの支援。
宮城の復興は、そんな数多の想いで成し遂げられています。

SUPPORT FILE
No.1

From カナダ To 名取市

ゆりあげ港朝市・メイプル館

名取市関上地区の沿岸部では、「よい品をより安く」をモットーに、約40年前から「ゆりあげ港朝市」が開催されています。東日本大震災では、朝市に出店していた事業者たちは津波で甚大な被害を受けました。彼らは被災しているにもかかわらず、品物をかき集め2週間後にはショッピングセンターの駐車場を借りて朝市を開催。人々を元気づけるとともに、離れ離れになった住民の再会の場にもなりました。

朝市が元の場所でグランドオープンしたのは2013年12月。再建の大きな力となったのが、「カナダ-東北復興プロジェクト」です。カナダ連邦政府、プリティッシュ・コロンビア州政府、カナダウッド・グループが主体となり、カナダ産木材を使用した建物を寄贈

し、店舗棟の一部と「メイプル館」が建設されました。毎週日曜と祝日、朝6時から朝市は始まります。新鮮な海産物を中心に、野菜や果物、弁当や総菜、飲食店など約50店舗が軒を連ね、「おいしいよ!」「食べてみて!」と威勢のいい声が飛び交います。

「ゆりあげ港朝市」が未永く愛され続けること。それが支援していただいた多くの方々への感謝につながる。店の人たちが生き生きと商売する姿と熱気から、その想いが伝わってきます。



SUPPORT FILE
No.2

From シンガポール To 七ヶ浜町

七ヶ浜町立遠山保育所 らいおんパーク

七ヶ浜町は、東北の市町村で一番小さな港町。丘陵地にある遠山保育所は、東日本大震災の地震により大規模半壊してしまいました。

震災から3カ月後の6月、シンガポール赤十字社が被災地を支援する復興プロジェクトを探しているという情報を知り、支援を受けられないかと奔走したのが、当時七ヶ浜町地域福祉課長だった寺澤薫現町長でした。「小さな町を支援してもらえるか正直分かりませんでした。シンガポール大使に手紙を送ったり、視察に来ていただいたり、なんとか遠山保育所を再建したいという想いを伝えました」。保育所の再建をいち早く進めることで、住民が「これからもこの地域で安心して暮らしていける」という未来を想像することができ、復興への希望につながります。熱意が通じ、シンガポ

ル赤十字社による遠山保育所再建の支援が決定し、2013年4月に開所しました。

遠山保育所は、広い園庭を中心に、保育室やホール、調理室などがロの字で囲むように配置され、みんなで手をつないでいる形がイメージされています。愛称はシンガポールの「マーライオン」にちなみ、「らいおんパーク」と名づけられました。地域から親しまれ、子どもたちの元気な声が響き続けること。それが感謝への想いにつながっています。



SUPPORT FILE
No.3

From 三菱商事復興支援財団など To 気仙沼市

サンフレッシュ小泉農園

「目指しているのは『持続可能な農業』それだけ」と話すのは、サンフレッシュ小泉農園の代表取締役、今野圭市さん。農園は、サーフスポットとして知られる気仙沼市小泉海岸のすぐそば。約4haの敷地に2haのトマト養液栽培のハウスが建つさまは圧巻です。約4万3千株のトマトの苗木を栽培し、年間約600tを出荷しています。

十数年前の小泉地区は小規模農家が点在し、今野さんの実家も含めてほとんどが兼業農家。大規模園芸で採算性を確保し、雇用創出や担い手育成により地域の農業を後世に引き継ぎたいと、18名の地権者に借地の相談をしましたが、相手にされませんでした。

そんな時に起きた東日本大震災。小泉地区一帯は津波で大きな被害を受けました。農業復興のため、再び地権者に借地の相談をし

た今野さん。「農具はもちろん、長靴すら流されて何もなくなり、もう農業はやらないから好きに使ってくれと同意してくれました」。

今野さんは2015年にサンフレッシュ小泉農園を設立し、三菱商事復興支援財団の出資金などを活用して施設を整備し、2016年9月にトマトの生産を開始。震災で農業の継続を断念した農家20人を含む34人の従業員を雇用しています。さらに、国際認証「グローバルGAP認証」を取得するなど、様々な取組を続けています。



Thank you from MIYAGI

宮城から、ありがとう。

全国各地、世界各国から寄せられた、たくさんの支援。
宮城の復興は、そんな数多の想いで成し遂げられています。

SUPPORT FILE
No.4

From 日本ユニセフ協会 To 南三陸町
あさひ幼稚園

海・山・里の自然に恵まれた南三陸町。再建された南三陸町役場や南三陸病院などがある高台の志津川地区沼田は、町の中心となる地域。そこには町内唯一の幼稚園「あさひ幼稚園」があります。あさひ幼稚園の旧園舎はJR志津川駅のそばにあり、東日本大震災の際、園児と職員は全員無事でしたが、園舎は津波で全壊。

再建にあたり大きな力となったのは、日本ユニセフ協会。プロサッカー選手である長谷部誠さんが、著書の印税やチャリティーイベントの収益などを日本ユニセフ協会へ寄付し、再建に充てられました。

あさひ幼稚園の小島孝尋園長は、南三陸町内にある「大雄寺」の住職です。震災の津波で寺の参道にある巨木の杉並木が被災し、塩害で枯れてしまう運命にありました。その杉を再建する園舎に使おうと提案

をしたのは、建築を手がけた手塚建築研究所でした。「[あのまま朽ちて倒れるばかりかと思っていたので、園舎に使われてよかった]と地域の人たちも喜んでくれました」と小島園長は当時を振り返ります。

「300年以上にわたって寺を守ってきた杉が、姿を変え、命を巡り、今度は子どもたちを見守ってくれています」と穏やかな笑顔で話す小島園長。「この園舎でのびのびと学び、世界のために役立つ人に成長してもらえたら」。



SUPPORT FILE
No.7

From 台湾 To 南三陸町
南三陸病院

南三陸町内唯一の病院である「南三陸病院」。前身の公立志津川病院は、東日本大震災の津波で被災。再建にあたり大きな力となったのは、台湾から寄せられた海外救援金でした。台湾赤十字組織から建築費用の約4割にあたる22億2,000万円もの支援を受け、2015年12月に診療開始となりました。

診療科は内科や外科、小児科など10科で、病床は90床。病院施設に加え、地域の保健や福祉といった行政サービス施設「総合ケアセンター」も併設。両施設の間には、「みなさん通り」というホールがあり、緊急時にはトリアージをする場所としても使えるようになっています。

「このホールは緊急時、多くの人が訪れて椅子に座りきれない場

合でも、底冷えしないよう床暖房を設置しています。震災時はとても寒かったですから…」と事務次長の後藤正博さんは言います。緊急時にベッドとして使えるソファをロビーに配置したり、柱の所々には酸素取り込み口を設置したり、震災の教訓を活かしています。事務長の佐藤和則さんは「本病院の来院者数は1日平均200人で、病床稼働率は90%です。町の入院施設はここしかありませんので、地域医療の拠点としてこれからも頑張りたい」と話してくれました。



SUPPORT FILE
No.5

From カタール To 女川町
MASKAR

女川町は古くから良港として栄え、サンマ漁では日本有数の水揚げ量を誇り、銀鮭や牡蠣、ホタテ、ほやなどの養殖業も盛んな水産業のまち。東日本大震災の津波で大きな被害を受け、瓦礫を撤去した港の更地にいち早く建設されたのが、「MASKAR」でした。

「[女川は必ず復興する]という強いメッセージを発信したかった」と話すのは、MASKARを運営する女川魚市場買受人協同組合の理事長、石森洋悦さんです。MASKARは、水揚げされた水産物や加工した水産加工品を保存するための冷凍冷蔵施設。秋のサンマ漁に間に合わせるため、2012年4月末に工事を着工し、10月15日に操業開始という驚異的なスピードで建設。「基幹産業である水産業の再開をアピールすることで、MASKARは復興のシンボルになりました」と石森さん。建設費

用の20億円を支援してくれたのは、震災直後に「カタールフレンド基金」を設立した、世界有数の天然ガス産出国であるカタールでした。

「現在のMASKARは復興のシンボルとしての役割を終え、施設を活かすための様々な取組をしている段階。魚市場から冷凍冷蔵庫、加工場、小売店までエリア全体が高度な衛生基準を満たし、まち全体で高価値の商品を生み出しています。女川の商品が世界的なブランドとなり、活気あふれるまちにできた」。



SUPPORT FILE
No.8

From 末日聖徒イエス・キリスト教会 To 亶理町
製氷・冷蔵施設

亶理町の荒浜にある宮城県漁業協同組合仙南支所(亶理)では、底びき網漁業や刺網漁業で漁獲されたヒラメやカレイ、サケなど、様々な魚介類が水揚げされているほか、海苔養殖も行われています。東日本大震災の津波で、荒浜漁港に係留していた漁船84艘のうち82艘が流され、うち56艘が廃船に。魚市場、製氷・冷蔵施設なども被災しましたが、震災から約1カ月後の4月から応急活動をスタート。6月下旬に水揚げが再開されました。「漁を再開したものの、夏場に向けて氷と冷蔵庫がなく、どうしようかと思っていたら、製氷・冷蔵施設を寄贈いただいたので助かりました」と話すのは、同支所の支所長、佐伯さんです。

製氷・冷蔵施設を寄贈したのは、末日聖徒イエス・キリスト教会

です。「7月に施設が完成し、おかげで鮮度の良い魚を市場に供給できました」。その後、風評被害や漁獲規制などの影響を受けましたが、漁獲量は2016年に震災前の2.8倍になりました。

「温暖化の影響なのか漁獲量は2016年のピーク時の半分ほどに。サケやヒラメの採卵・稚魚の放流など、資源の管理を行いながら、漁場を永続的に使っていくことが重要です。また、6次産業化にも力を入れています。様々な取組をすることで、亶理の水産業を盛り上げたいですね」。



SUPPORT FILE
No.6

From 図書館振興財団・日本ユニセフ協会・カナダ東北復興プロジェクト To 名取市
名取市歴史民俗資料館

2020年5月31日に開館した「名取市歴史民俗資料館」は、様々な団体の支援により建設されました。

震災前、この場所には名取市図書館がありました。築50年を超える建物は、震災による地震で解体することに。移動図書館車や離れの書庫などを活用しながら続けていた図書館は、2011年11月、図書館振興財団の支援でプレハブの建物が建設され、さらに2012年1月には日本ユニセフ協会の支援で「どんぐり子ども図書室」、同年12月にカナダ東北復興プロジェクトの支援で、「どんぐり・アンみんなの図書室」が完成。その後、名取駅前図書館を新設することになり、それらの建物は、感謝の想いを受け継ぐため「名取市歴史民俗資料館」として新たに生まれ変わりました。

2つの図書室は展示室に、プレハブの建物は、体験学習や各種講座、資料館の展示ガイドなどを行うボランティアの活動拠点施設として活用されています。「これまで名取市の歴史・文化を紹介する市の施設はありませんでした。歴史講座や企画展の展示解説などの企画は予約で埋まっており、興味を持っていただいています。今後は「資料館はいつも何か企画をやっているよ」と気軽に来ていただけるよう、魅力ある企画を打ち出していきたいですね」と館長の鶴崎さんは話してくれました。



SUPPORT FILE
No.9

From セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン／サントリーホールディングス To 石巻市
石巻市子どもセンター らいつ

「石巻市子どもセンターらいつ(以下らいつ)」は、利用者である子どもたちの想いが具現化された児童館です。設立の背景には、セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン(以下SCJ)とサントリーホールディングス(以下サントリー)の支援がありました。

SCJは、2011年7月に「まちのために何かしたい」と願う小・中・高校生たちに呼びかけ、「石巻市子どもまちづくりクラブ」を発足。子どもたちは「夢のまちプラン」を描き、「石巻の活性化のために中高生が中心となってつくり、運営していく施設」「みんなが過ごやすく、子どもの想いを世間の人たちに伝えられる場所」をコンセプトとした児童館の設立を企画し、石巻市に提案。子どもたちは行政や地域住民と意見交換を重ね、施設のデザインにも携わりました。

建設費用は、サントリーが支援し、2013年12月にらいつが完成。石巻市に寄贈され、翌年1月にオープンしました。

らいつでは、子どもたちが施設運営に参加し、施設のルールを決めたり、イベントを開催したり、まちあるきマップを作成するなど、子どもが主体となって様々な活動に取り組んでいます。「子どもの主体性を大切にしながら、これからも子どもの社会参画を実現する児童館として邁進していきたいです」と館長の荒木さんは話してくれました。



情報発信の取組 2 ●WEB

宮城県の「いま」を発信する「みやぎ復興情報ポータルサイト」。
NOW IS.取材班によるインタビューや著名人など、さまざまな書き手による、多角的な視点で情報を発信してきました。



WEBサイト

宮城の復興情報を発信する、「みやぎ復興情報ポータルサイト」では復興に関するお知らせや復興の進捗状況、復興に向けた取組など様々な情報を発信しています。

みやぎ復興情報ポータルサイトはコチラから!
<https://www.fukkomiyaagi.jp>



ブログ・復興取材レポート

● いわたかれんの復興フォト

これまでの被災地訪問は100回を超える岩田華怜さん。「写真」に想いを込めて、被災地の状況を発信しています。



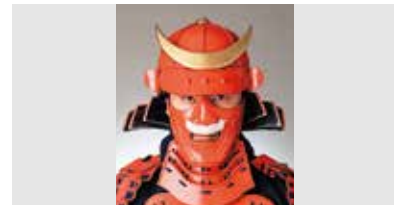
● 宮城の美味しいをお取り寄せ

東京を拠点に活躍する黒羽 麻璃央さん。宮城の味をお取り寄せして、レポートします。



● SAMURAI JAPAN PROJECT

宮城を世界へ
日本の魅力を世界に発信するインスタグラマー。歩いて見つけた宮城の魅力を紹介しています。



● 宮城発! 元気と食の最新情報

震災からの復活を遂げた企業の元気なトピックや、注目のグルメを紹介します。



● カモキチ復興レポート

カモキチが広報紙「NOW IS.」の取材の裏側などをレポート!



● 復興インタビュー

宮城県内で復興に向けた取り組みを行う方々の声を聞きました。



● 語り部が本当に語りたこと

震災の記憶や得られた教訓を語り継ぐ「語り部」さんの想いを取材しました。



● NOW IS. 防災

防災のヒントや防災知識の最前線をお伝えします。



● 震災遺構

震災の記憶や教訓を後世に伝える震災遺構を巡り、紹介しています。



情報発信の取組 3 ●その他

全国の方々からの支援と励ましに支えられながら、復興の歩みを進めている宮城県。
今もなお復興に向けて取り組んでいる人々の姿を伝えるためのポスターやパネルを制作してきました。

宮城の「いま」を伝える ポスター・パネル

復興にかける想いや決意を全国に届けます。

復興の過程で生まれた新たな“価値”や“教訓”を未来に生きる情報として全国に発信するため、復興に向けた取組を行う方々をポスターにして全国の公共施設等に掲出しているほか、パネルにしたものをイベント等で展示しています。

※パネルの貸出しも随時受け付けています。



イベントでの展示の様子。



ポスターは、宮城県内はもちろん、全国の公共施設や公共交通機関などに掲出しています。震災から立ち上がる人々の姿と想いをご覧ください。



10枚で構成されるパネルには、被災直後と現在の様子を写真で見比べる特集や、復興の様子をデータで紹介する特集、地元の方々の想いを伝える特集などがあります。



スペシャル動画

東日本大震災から10年という節目に、宮城県の「いま」と、私たちの「想い」を伝えるため、動画を制作しました。日本中、そして世界中の方々へ、10年分の「ありがとう」を込めて…。ぜひご覧ください。



SNS



SNS「いまを発信!復興みやぎ」では、取材チームが見た被災地の「いま」を発信しています。皆さまからの投稿もお待ちしております。ハッシュタグ「#fukkomiyaagi」をつけて、撮影した画像をお寄せください。